

聞名仏教

第 165 号 毎月発行
(発行日) 2024 年 6 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutsuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号 17810 番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

息の止まった途端は 佐々木蓮磨

人も賤人も、智者も愚者も、何ら変わるところはありません。多くの人は、この人間の姿をゴマ化して

おります。そのために、本当に安心した生活はできないのであります。今日はレジャーブームと言って、暇をつくっては享樂を貪っているのですが、考えてみれば実に危い、また恐ろしい生活をしているのであります。「八万の法藏を知るといっても、後世を知らざる人を愚者とす。たとい一文不知の尼入道なり」とも、後世を知るを智者とす」という蓮如上人のお誡めは、

時代がいかに変わり、国がいかに違っても、厳として変ることなき金言であると思えます。後生の一大事とは、死後の問題ではなく、今日、只今の問題であります。私どもは、何はさておいても、この問題の解決を急がねばなりません。後生の一大事は、今日、ただ今の一大事であります。

現代人は、死後のことなど全く問題にしていないようです。そのため、地獄や極樂の話などは殆んど冷笑に付し、「後生の一大事」などという、全く時代おくれの話として、耳を傾けぬ傾向が見受けられますが、それは従来の説教が、説教者自身の信念から説かれるのではなく、一つの物語式に説かれてきたことにも起因していると思えますが、また反面には、人生を深く探究していかないということも大きな原因になっているように

思います。

人間というものは、日頃「あれで困る」「これで困る」と言っているが、そうした困り方はなんとか救われる道があるものです。例えば病気で困っているのであれば、医者や薬の力で救われる道があります。貧乏で困っているとすれば、同情ある人の力で救われないこともありません。その他いかに困る問題でも、必ず何かの道が開かれるものであります。

先年、ある老婆の臨終に出会ったことがあります。人間の臨終というものは極めて厳粛なもので、冗談などは決して話されるものではありません。古人も「人の將に死なんとする、その言や善し」と言っているように、死に直面している人自身はもちろんのこと、傍にいる人も真面目な気持ちになって、真実を語るものであります。

現代人は、死後のことなど

この息が最後か、次の息が

最後か、と見守っているとき、一人の若い娘さんが私に尋ねて言うには、「おじさん、このお婆さんの息が止まった途端は、どうなるのでしょうか、そこを考えると、何だか恐ろしくなってきました云々」と。私は、この娘さんの偽らざる述懐を聞いて、万人最後の叫びが聞こえたような気持ちがいたしました。

この娘さんは、今までに仏法の話など聞いたことのない、

ところが、いよいよ死なねばならぬということになると、この世界の何物をもつてしても、救うことはできません。ただ、独りで死んで行くほかは、ありません。しかも、死後は、全く測り知れぬ闇黒の世界です。どうして安心することができるでしょうか。この淋しさと、不安を癒す方法は、絶対にあります。この悩みばかりは、貧者も富者も、貴

対話編 『浄土真宗』

11

B 「今回は第十八願について、ことに〈乃至十念 若不生者 不取正覚〉のお誓い、いわゆる念仏往生の誓いのお心をお聞かせ頂きました。今回は第十八願の〈至心信楽 欲生我国〉についてお話しください」

(原文)
設我得仏 十方衆生 至心信楽 欲生我国 乃至十念 若不生者 不取正覚 唯除五逆誹謗正法

(書き下し)
たといわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心信楽して、わが国に生ぜんと欲いて、乃至十念せん、もし生ぜずは、正覚を取らじ。ただ五逆と誹謗正法とをば除く。

(和訳) たとえ私が仏になりえたとしても、十方の世界にあつて、さまざまな悩みをいだきつつ生きるすべてのものが、私の救いになるものがないこと(至心)を疑いなく信じて(信楽)わが国に生まれることができるとおもつて(欲生我国)、たとえわずか十返なりとも念仏申すばかりで、もし浄土に生まれることができないようなら、私は正しくめざめたもの(阿弥陀仏)にはなりません。ただ五逆の罪を造り仏法を否定するものは、このかぎりではない。

この中〈至心信楽 欲生我国〉は〈至心に信楽して、我が国に生まれんと欲え〉で、意味は〈我が誓いをまことと信じて我が浄土に生まれるとおもえ〉という内容で、この中心は信楽すなわち信心です」

B 「では〈至心〉とは」
A 「本当に、まことにという意味です」

B 「信楽とは」
A 「信ぜよ、という意味で、信じてくれよというアミダ仏(法蔵菩薩)が私たちに勧めの言葉です」

B 「何を信ぜよとお勧めくださるのですか」
A 「乃至十念 若不生者 不取正覚」の誓いです。この念仏往生の誓いを本当と信ぜよとおこころです」

B 「我が名を称えるばかりで助ける」という念仏往生の誓いをほんとは信じてくれよ、との仰せなのでですね」
A 「ええそうです。信じなければ、念仏往生の(まるまる助ける)というアミダ仏の救いの法が我身の救いにならないからです。たとえば東京に行くのに、新大塚駅のホームにいて、東京行きの新幹線が来て(お乗りください、東京行きです)

とアナウンスがあつても、乗らなかつたら東京に行けないように、浄土行きの南無阿弥陀仏のお誓いのはたらきが来て、それに乗らなければ浄土に行けないようなものです」

B 「そうすると至心信楽とは、念仏往生の願はまこと(至心)だから、どうか信じてくれよ、乗れよというアミダ仏のお心なのでですね」
A 「ええそうです。(称えるばかりでまるまる引き受ける)で、どうか任せ(まか)してくれよ、タノメのおこころが至心信楽のアミダ仏の大悲のお心です」

B 「では欲生我国(我が国に生まれんとおもえ)とは」
A 「(お誓いを信じて) 我が浄土に生まれることができると思つて安心してくれよというご親切です。南無阿弥陀仏となつて口に耳に現れてくださるお助けを聞いて、(ああ、浄土に生まれさせてくださる、ありがたい)と喜ばせていただく。そういう未来を与えてくださるところの喚びかけ(我が

国に生まれんとおもえ)のアミダ仏の仰せなのです」

A 「次に〈至心信楽 欲生我国〉の思召しをもう少し親鸞聖人のお心にそつて深掘りしますと、至心とはアミダ仏の眞実心です。法蔵菩薩は、人間には眞実の心はなく、清浄なる心もなく、仏に成るような因は一つもないと知り抜いて、このような衆生を救うために、法蔵菩薩は清浄眞実の心でもつて、一切衆生を助けたいという願を起こし修行して衆生を救う力を成就されました。そして私たちに、(この誓いの力によつて汝を救うから、どうかこの誓いにお勧めの言葉が至心信楽といわれます」

B 「眞実は衆生にはなく、アミダ仏の誓願のはたらきが眞実なのでですね」
A 「ええ、ですからその眞実の現れが南無阿弥陀仏であり、(汝を間違ひなく救う)という仰せとして喚びかけられてゐるのです」
B 「お念仏の南無阿弥陀仏

のお声はアミダ仏からの喚びかけなのですね」

A 「ええ、私たちの口に現れたもう南無阿弥陀仏は私への喚び声であり、具体的な大慈大悲の現れです」

B 「信樂とは」

A 「この信樂はアミダ仏の信心であって、法蔵菩薩は人間には清浄な信心がなく、信心を起し得ないと見て、信心までも衆生に与えようとして願行成就されたのが南無阿弥陀仏です。ですからこの信樂は、この南無阿弥陀仏で衆生が助かることに一点の疑いもない、という法蔵菩薩の信心です。そして、どうかお願いだからすなおに聞き受けておくれ、とのやるせないお心です。にもかかわらず、それを聞いても私たちは受け入れないのです。それでアミダ仏は何度も何度も私たちに喚びかけておられるのです。申し訳ないことです」

B 「では欲生我国とは」

A 「これも法蔵菩薩が、(衆

生を我が浄土に生まれさせたい)とお心です。一切衆生を我が国に生まれさせたいという願で修行を成就された南無阿弥陀仏、これを私たちに与えようとされる心が欲生我国の心に籠もっています」

B 「衆生を浄土に生まれさせたいというお心から私たちに南無阿弥陀仏を与えてくださるのですね」

A 「南無阿弥陀仏を与えて聞かそうという心でもありませんから、欲生我国の心の回向ともいわれます。この回向のお心は、浄土に生まれさせたいというアミダ仏の願心からの南無阿弥陀仏の回向です。回向とはふりむけ与えようとはたらしきです。私たちにアミダ仏の救いである南無阿弥陀仏をさしむけたもうお心で、それは第十七願としてことに誓われています」

B 「第十七願とは」

A 「衆生を救いたもう南無阿弥陀仏を衆生に回向すなわち与えて下さるお誓いです。私たちが一切衆生に南無

阿弥陀仏を称えさせ、聞かせて、信じさせてくださるお誓いです」

B 「私たちにお念仏が申されるその元はアミダ仏の第十七願の回向によるのですね」

A 「ええそうです。そのために、法蔵菩薩は、十方世界の仏たちに南無阿弥陀仏を讃歎されたいと誓われました。それに拠って、私たちに南無阿弥陀仏を届けた

いと法蔵菩薩のお心です。もし南無阿弥陀仏が仕上げられていても、誰も南無阿弥陀仏をほめることも讃えることも勧めることもしな

ければ、衆生は南無阿弥陀仏を信じないからです」

B 「身近なことと言うと、私たちが念仏を申すようになったのは、人から念仏を勧められるとか、勧めてくださる本を読んだりなどを縁として、(それじゃあ、私も)となって称えるようになりますね」

A 「なお第十八願には、信心を衆生に成就させずにはおかないというお心が入っています。それが(十方衆

生 至心信樂欲生我国 若くは不生者不取正覺)という信心の誓いです。このお心から親鸞聖人は第十八願を(至心信樂の願)ともいわれました。そして第十七願にも、念仏往生の誓いを信じなければ衆生は助からないので、衆生に信じさせたい、信じさせずにはおかないというお心がこもっています」

心に流れ込んで信心となつてくださるからです。念仏往生の願を信じる信心は如来の大悲心の外にはありません」

B 「大悲の願心をいただく信心なのですね」

A 「衆生の信心の元は大悲の願心であり、大悲の願心は念仏往生の願に現れています。この大悲のお心を聞くところに与えられるのです。もうすこし具体的に言えば、称える念仏の一声を聞く。それは(一声称えるばかりで浄土に往生せしめる)という絶大なる大悲の心を聞くのです。このところを法然聖人は、

煩惱のうすくあつきをかへりみず、罪障のかるきおもきをも沙汰せず、ただ口に南無阿弥陀仏となへて、声につきて決定往生の思ひをなすべし。

と仰せられ、声について往生を間違いないと定めなさいと仰せくださるのです」

B 「称えている念仏の声に於て、(二声なりとも称える

於て、(二声なりとも称える

ばかりで助ける」の願心を聞き受けるのですね」

A 「ええそうです。香樹院徳龍師にのお話に、

嘉永三年（一八五〇）九月某日、或る同行、師を劍先の寮に伺い申しつけるが、仰せに。

必らず、六ヶ敷いことを云うな。地獄へ墮ちるものを、このまんま、助けて下さる事を、喜ぶのじゃほどに。帰ったら他の同行へも申ししてくれ。

又翌朝、御暇乞いの御札に参りければ、仰せに。

念仏するばかりで、極楽へ生まれさせて下さるのじゃほどに。それを念仏する計りと云えば、また称えるに力をいれる。

そこで法然様の仰せに、差別が出来たのじゃ。ただ称うるばかりで助かることを、聞くのじゃほどに。他の同行えもよう云うてくれ。

と仰せられています。〈称うるばかりで助かることを聞くのじゃほどに〉と、いわ

れるところが大事です。ですから称名を離れて聞くのではありません。それを十人願成就文では〈その名号を聞く〉といわれるのです。

念仏往生の誓いの名号を聞くのです。〈一声称えるばかりで助ける〉を、称える一声に於て聞くのです。それはおのずからへソノママナリデ全面的に助ける、引受ける〉と聞かされるのです」

B 「一声の念仏の声において、〈一声ばかりで助ける〉の仰せは、〈そのままなりで全面的に引受ける〉というアミダ仏の大悲心なのですね」

A 「ええそうです。古来、真宗のお助けは〈善人は善人ながら、悪人は悪人ながら、そのままなりのお助け〉と伝えられてきたのはこのゆえです、この十八願に元があるのです」

B 「そうすると、本願を信じる信心は、〈そのままなりで助ける〉の大慈大悲の心を聞くところに与えられるのですね」

A 「ええ、アミダ仏の大慈大悲の広大ななさを聞く、

そこに大悲が我が身に潜み入り、私の心に本願を信じる信心として発起してくるのです。ですから信心も私の心から起るのではなく、アミダ仏の大悲心によって起るのです。これを聖人は信巻の初めに、

信樂を獲得することは、如来選択の願心より発起す。

といい、また、

この心（信心）すなわちこれ念仏往生の願より出でたり。

と仰せられるのです」

B 「しかし、それほどのアミダ仏のご親切にもかかわらず、なかなか信心が起り難いのはなぜですか」

A 「それは我身がアミダ仏に助けていたただかなくてはならないほどの無知無力の煩惱だらけの存在であると感じていないからです。助けられねばならない私と思

っていないからです。です

からアミダ仏の（タスケル）が響かないのです。受け取れないのです」

B 「（私はこのままで良い、助けられる必要はない）、と高ぶっているから、アミダ仏のお助けが受け取れないのですね」

A 「そうなのです。私たちが救われ難き愚かな身であることを知らないからです。大悲の本願を聞くことによつて、逆に救われ難き我が身と知らされるのです」

B 「弥陀の本願は私たちを助からぬ者と知らせて救うてくださるのですね」

A 「ええ、南無阿弥陀仏は助からぬ者を助ける大悲心です。全く救いの無き者、望み無き者をまるまる引き受けたもう南無阿弥陀仏なのです。それが正信偈の〈極重悪人唯称仏〉のお心です」

B 「アミダ仏は、私たちが救いなき身であることをどのようにして知らせてくださるのですか」

A 「第十八願の〈唯除五逆誹謗正法〉の仏語などによつてです。これについては次号でお話しします」（了）

【住職雑感】

最近の世界の情勢を見て、実感することだが、世界の国々の政治指導者の、ひいては世界の人々の、自分を含めて、思考や思想の劣化、貧しさである。科学技術と経済の発展だけで世界は良くなるという考えが染みついているのではないかとさえ思う。経済が豊かになつても、あるいは科学技術がどれほど発展し便利になつても、人間の考えや思想や信条は決して、その質が深くも高くもならないばかりか、むしろ劣化してきていると感じる。ロシアや中国はいうまでもなく、アメリカもしかし、日本も変わりはない。自国の安定は武力の増強で確保できると思つている節がある。そういう考えが今日、世界中での緊張と戦争の危機、そして世界の破壊すら現実化する怖れを招いているのではないか。現代、なにが足りないのか、一言で言うと、人と人、国と国、民族と民族が「共に生きよう」という視点である。特に求められるのは一国の指導者層に対してである。こういう視点が生まれるには「すべての人は同じ大きないのちを共に生きている兄弟である」という感覚である。これが国の指導者がつべき基本の考えでなければならぬ。こういう視点が生まれるにはやはり真理を学ぶ教育が大事である。